

川 一
小 二
木 三
大 四
日 五
目 六
中 七
犬 八
上 九
人 十
山

平成
5年5月7日
松本市横町一丁目
桐原義司
重久旧習字学校

フ
ハ
リ

昭和七年十二月廿二日印
昭和七年十二月廿五日發行
昭和七年十二月廿六日翻刻
昭和七年十二月十五日翻刻發行

著作權所有

著作兼
發行者

文

部

省

定價金七錢

小學國語讀本專習用卷二

東京市小石川區久堅町百〇番地 25
日本書籍株式會社

代表者

大橋光吉

印刷所

東京市小石川區久堅町百〇番地
日本書籍株式會社工場

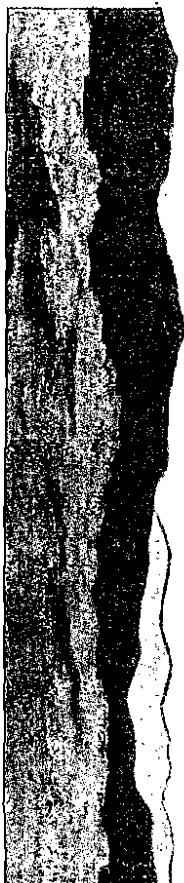
發行所

日本書籍株式會社

昭和七年七月二十八日
文部省檢査済

ガ ラク

サ ク サ
イ ガ
タ



尋國一

タイサ

サ イ サ
イ タ
タ



A black and white woodcut-style illustration of a woman in a long, dark, textured dress, looking down and holding a small object in her hand. A small plant with leaves is visible near her head.

上 1 出 1

F - F I

山ニ
 ヲカフノ
 ノボジタラ、
 山ノ
 ヲカフノ
 村ダッダ。
 タノボノ
 シジク
 村ダッダ。

尋國二

第二圖

七ノ口ノ

一	山ノ上	一	十一	才正月	六十
二	才月サケ	四	十二	コトトリ	六十二
三	アシタハ エシク	七	十三	カゲエ	七十四
四	カケキリヂイサシ	十四	十四	ユキ	七十七
五	サル ト カニ	十六	十五	雪 ヨ フレ フレ	八十一
六	カクス ヨ イソゲ	二十九	十六	花サカチヂイ	八十三
七	ケシキヤシ	三十二	十七	ウゲヒス	九十七
八	ワタシ ノ ニギヤウ	三十六	十八	ゾクシ	百二
九	ニギヤウ ノ ビヤウキ	三十八	十九	キシヤ	百四
十	オホミ ノ ヨメイリ	四十四			

4

昭和
6月10日
桐原義司
文部省
文部省
文部省

日五十月二年九和昭
濟查檢省部文

發行所

日本書籍株式會社

印刷所
日本書籍株式會社工場
東京市小石川區文堅町百〇八番地

代表者
大橋光吉

翻刻發行
兼印刷者
日本書籍株式會社
東京市小石川區文堅町百〇八番地 24

發行者兼
著作權所有
文部省

昭和九年二月十二日
昭和九年二月十四日
昭和九年三月十四日
昭和九年三月十四日
昭和九年三月十四日
昭和九年三月十四日
昭和九年三月十四日
昭和九年三月十四日
昭和九年三月十四日
昭和九年三月十四日

定價金拾四錢

小學國語讀本尋常科用卷三

蛙今吸國神力舟西雄次草近
橋男用刀千本百取強庭指羽寸名
高每行思針遠向良作茶色切細合
君紙氣助何首買持急星度金池深
落聞消美銀受直話若自動止知聞
別走道夕朝洗使答夜忘通集賣海
呼黃門貝家箱住死步

をり

春が来た

なはとび

うきぎ

とび

しりとり

しまこ

かんがもの

とけい

うちの子ねこ

蛙

國びき

サ、舟

牛若丸

とんぼ

一寸ボウシ

かちく山

ねずみのちま

キンギョ

花火

金のもの

自動車

長い道

むしば

浦島太郎

四十一 牛若丸
四十六 とんぼ
四十八 一寸ボウシ
六十一 かちく山
六十九 ねずみのちま
七十三 キンギョ
七十五 花火
八十六 金のもの
九十二 自動車
百 長い道
百二 むしば
百七 浦島太郎

たが、

一 春が来た

春 春
が が
来た 来た

どこに 来た。

山に 来た、

ことに 来た、

のにも 来た。



昭和
63
6月10日
寄贈
桐原義司
文部省
文部省
文部省

日十二月八年九和昭
濟查檢省部文

發行所

日本書籍株式會社

印刷所

東京市小石川區久堅町百八番地
日本書籍株式會社工場

代表者

大橋光吉

翻刻發行
兼印刷者

東京市小石川區久堅町百八番地
日本書籍株式會社

著作權所有

發行者兼
著者

文部省

昭和九年八月十五日印
昭和九年八月十八日發
昭和九年八月十八日翻刻印刷
昭和九年九月十一日翻刻發行

定價金拾五錢

小學國語讀本 尋常科用 卷四

着物鳥昔枝波麥豆困軍畠黑勇字書讀加賀
旗並負笑女娘世申晚都界兵追弓矢腹親圓
樣始足包渡栗逃移反聲江鬼晝谷進岩待酒
弱喜尋殺鐵番休野元身拔文橫後弟兩分枚
新錢營服氏汽乘降兎島陸仲多連背毛痛主
兄重節供福內妹拾勉將攻召敵射勝歌心城
流珍丸會開引平折命滿官桃友北南冬寒暖
氷終半眠送霜芽衣原寄返富士悲代終

もくろく

一	富士の山	一
二	早鳥	四
三	海軍のにさん	十二
四	カクコ	二十一
五	かぐやひめ	二十六
六	たぬきの腹づみ	三十八
七	月と雲	四十
八	ヲヂサンノウチ	四十七
九	山から	五十二
十	山からの思出	五十四
十一	大江山	五十六
十二	鬼つこ	七十二
十三	いびん	七十五
十四	ニイサンノ人營	八十四
十五	すめ	九十
十六	白兎	九十二
十七	豆まき	百一
十八	百合若	百七
十九	ひなまつり	百十二
二十	北風ト南風	百十四
二十一	羽衣	百三十

尋國四
尋國四

一富士の山

あたまたを
雲の上に出し
四方の山を
見おろして
かみなりさまを
下に聞く



起涼砲雷丈釣孫治汝皇位事相
問承峯我戰陣幾淚實電席言表
魚獸狩惡願仕其教此殿汲案樂
配鯛面恐

昭和十四年十一月四日修正印刷
昭和十四年十一月七日修正發行
昭和十四年十一月二十日翻刻發行
昭和十四年十一月二十日翻刻發行

著作權所有

著作兼
發行者

(特)

文

部

省

定價金拾四錢

小學國語讀本聲帶角卷五

翻刻發行
兼印刷者

代表者

大

橋

光

吉

日本書籍株式會社
東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所

日本書籍株式會社工場
東京市小石川區久堅町百八番地

昭和十四年十一月八日
文部省檢査濟

發行所

日本書籍株式會社

もくろく

一	天の岩屋	一
二	参宮だより	六
三	おたまじやくし	十一
四	天長節	十七
五	八岐のをろち	十九
六	鯉ノボリ	二十五
七	遠足	二十六
八	青葉	三十四
九	動物園	三十六
十	逃げたらくだ	四十二
十一	蠶	五十三
十二	田植	五十六
十三	少彦名のみこと	五十七
十四	舟の上とた、みの上	六十五
十五	水の旅	六十八
十六	大川	七十四
十七	夕モノス	七十六
十八	夏の午後	八十八
十九	日記	八十五
二十	こぼるぎ	九十二
二十一	天孫	九十四
二十二	犬のてがら	百一
二十三	電車	百四
二十四	水引草	百十
二十五	二つの玉	百十二

一 天の岩屋

天照大神が天の岩屋へおはりになつて岩戸をおしめになりました。明かるかつた世界が急にまづ暗になりました。すると今までかくれてゐた、いろ／＼のわるものが出て来て、さんばうをしたり、いたづらをしたりしました。

大ぜいの神様がお集りになつて、

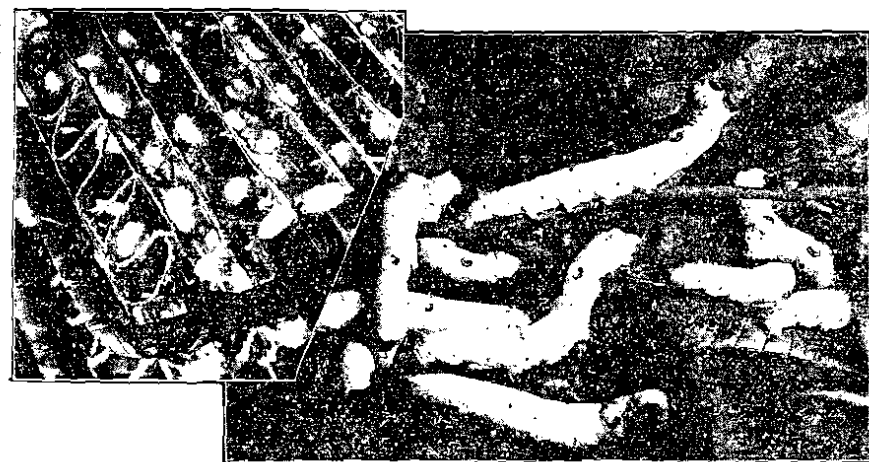
二人「もしく、お役人様、それなら、荷物の品を、
どうして知つて居るのでございませうか。」
旅人「それは何でもありません。道に、麥がこ
ぼれて居たからです。」

役人「よし、よくわかつた。たしかに、お前
がぬすんだのではない。もう、がへつてよ
ろしい。二人がうたがつたのも、むりでは
ないが、今聞いた通りである。早く行つて、
らくだをさがすがよい。」

十一 蠶

キノフカラ、ウチノ蠶ガ上リ始メマシタ。上
ル頃ニハ、蠶ノカラダガ、スキ通ルヤウニナリ
マス。モウ桑ノ葉ヲタベナイデ、頭ヲ上ゲテ、
繭ヲカケル所ヲサガシマス。ソレヲ拾ツテ、
マブシヘ移スノデスガ、少シデモオクレルト、
カゴノマハリヤ棚ノスミナドデ、繭ヲカケ始
メマスカラ、チツトモユダンガ出来マセン。

又



ケフノ才晝頃ハ、ウチ中、目
ガマハルホド、イソガシウ
ゴザイマシタ。
マブシノ中デハ、カサ〜
トイフ音ガシテ居マスガ、
コレハ、蠶ガ動クカラデス。
早イノハ、モウ繭ヲ作り上
ゲテ居マス。又、作りカケ
ノウスイ繭ノ中デ、キユウ

幸國五

事國五

クツサウニ、カラダヲマゲテ、一生ケンメイニ
ハタライテ居ルノモアリマス。マダ、繭ヲカ
ケル場所ヲサガシテ居ルノモアリマス。今
桑ヲタベテ居ル蠶モ、アシタノ朝マデニハ、大
テイ上ツテシマフサウデス。
サツキ、オカアサंगा、

「イヨ〜今夜一晚ニナツタ。」

ト、ネエサンニオツシヤイマシタ。オカアサ
ンモ、ネエサンモ、コノ五六日ハ、夜モロク〜

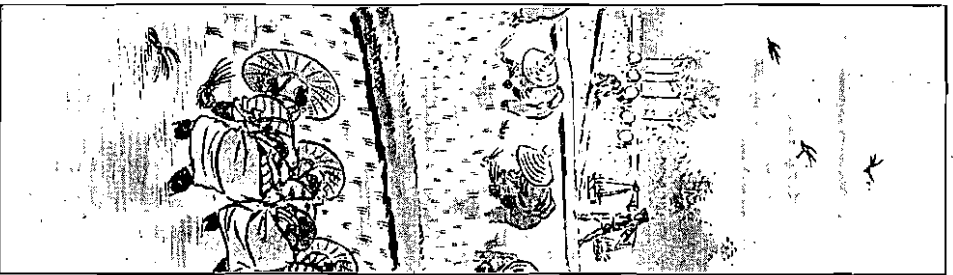
オヤスニナライノデス。

十二 田植

朝からたんぼのにぎはし。
村中そう出て、田植だ、田植だ。
すげ笠あみ笠赤だすき、
笑ひ聲やら歌の聲。

晩までたんぼのにぎはし。

十三 少彦名のみこと



となり近所やしんるゐ仲間、
手つだひしあつて、植ゑるはしから、
早もつばめのちう返り。

大國主のみことが、出雲の海岸を歩いて、

昭和十一年六月四日修正印刷
 昭和十一年六月六日修正發行
 昭和十一年六月六日翻刻印刷
 昭和十一年六月二十五日翻刻發行

著作權所有

著者 發行者 兼

文

部

省

定價金拾四錢

小學國語讀本尋常科用卷六

重文旧聞書校資料

昭和十一年六月六日

昭和十一年六月六日

昭和十一年六月六日

昭和十一年六月六日

日 九 月 六 年 一 十 和 昭
 濟 查 檢 省 部 文

發行所

日本書籍株式會社

印刷所

東京市小石川區久堅町百八番地
 日本書籍株式會社工場

代表者

大 橋 光 吉

翻刻發行 兼印刷者

東京市小石川區久堅町百八番地 28
 日本書籍株式會社

一	神武天皇	一
二	祭に招く	十
三	村祭	十四
四	磁石	十六
五	稻刈	二十
六	日本武尊	二十七
七	山羊	三十九
八	林の中	四十五
九	僕の望遠鏡	四十八
十	神風	五十六
十一	軍旗	六十一
十二	牛かへ	六十四
十三	笑話	六十八
十四	千早城	七十二
十五	たこ	七十九
十六	雪の夜	八十一
十七	雀の宿	八十七
十八	火事	九十一
十九	梅	百
二十	小さい温床	百三
二十一	雪舟	百八
二十二	潜水艦	百十五
二十三	春の雨	百二十二
二十四	東京	百二十四
二十五	東郷元帥	百三十四

一 神武天皇

大和へ御進軍になつた神武天皇は、八咫鳥をお使として、其の地方に勢力を張つて居た兄うかし弟うかし兄弟の所へおつかはしになりました。さうして、天皇にお仕へ申すやうにお傳へさせになりました。

すると、兄うかしは、物も言はず、かぶら矢を取つて弓につがへ、八咫鳥をめがけて、ひようと

仕 張力 勢 進

砂

粉

硯

刈稻

「オモシロイ事ヲ教ヘテ上ゲヨウ。ソレヲ、
砂ノ中ヘツツコンデゴラン。」
トオツシヤツタ。

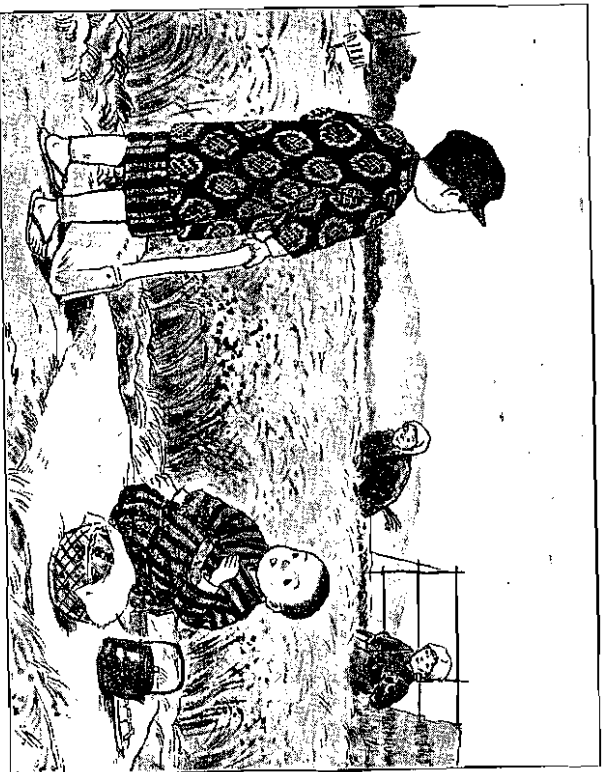
砂カラ取出シテニルト、黒イ粉ノヤウナモノ
ガ、磁石ニ一面ニ着イテ居タ。先ノ方ニハ、コ
トニダクサン着イテ居タ。コレハ、砂ノ中ニ
アル砂鐵ガ、グツ着クノダサウダ。

五 稻刈

遊敷

學校がすむと、すぐたんぼへ行つた。今日は、
うちの稻刈だ。よい天氣で、あちらでもこちら
でも、稻を刈つて居る。
田のあぜに、むしろを敷いてもらつて遊んで
居た弟が、遠くから僕を見つけて、
「にーちゃん。」
と、大喜びである。
「だ、今。」
と言つて、僕はかばんを下す。

稲を刈つてをられたおとうさんとおかあさ



んは、腰をのばして、
「やあ、もう學校がす
んだか。早かつた
な。」

「そのかごの中に、
おいもがあるから、
二人でおあがり。」

と言はれた。

飛

廻裏

むしたさつまゝもをかごから出して、弟と一

しよにたべた。

稲がだん／＼刈られて来るせぬが、いなこが、
たくさんこちらへ飛んで来る。さうして、稲
の葉や莖に止る。取らうとしても、ながく

つかまらない。

大きなのが一匹、すぐそばの稲の葉に止つた。
そつと近づくと、くると葉の裏へ廻つて、足
の先だけ見せて居る。右の手で、すばやく、葉

飼 園

と一しよにつかまへた。左の手で、頭のあたりをつかむと、後足をふん張つて、逃げさうにした。あわてて、ぎゅつとつかんだら、後足が取れてしまつた。下に置くと、飛べないので、地面をはつて歩く。

弟は、いなごを飼つて置くのだと言つて、田の土で園をこしらへた。いなごは、せまい園の中から、外へはひ出さうとする。

「此の牛は、じやうがないぞ。」

言

と、大きな聲で、弟がひとり言を言ふ。弟は、牛を飼つて居るつもりなのである。僕は、かしくなつて、ふき出した。

赤とんぼが、すい〜と、空を飛んで居る。

ざく〜と、稻を刈る音が聞える。僕も、何か手傳はうと思つて、おとうさんやおかあさんの方へ行つた。刈つたあとには、くゝつた稻の束が、田の上に並べてある。

おかあさんは、刈るのをやめて、稻束をまとめ

束

て、稻かけの方へ運び始められた。僕も、少しづつ持つて運んだ。
 一人ぼっちになつて遊んで居た弟が、たいくつして、

「あゝん。

と言つた。おかあさんが、

「お前、行つて遊んでやりなさい。」

と言はれたので、僕は又弟の方へ行つた。
 それから夕方まで、弟と一しよに遊んだ。

熊襲のかしら、川上たけるは、力のあるにまかせて、四方をうち從へ、後には朝廷の仰にも從ひませんでした。
 (二) 川上たける

六 日本武尊

「西の國で、自分より強い者はない。」と思ふと、たけるは、だんく、ぞうちやうして來ました。
 「一つりつばな宮殿を建て、たくさんの兵隊に

納除談隣厚之非賃革財布里峠
禮屈與染綿疊帶露舌惜霧嬉段
互低蒸吐景乃幼往詣浴鄉粗誠

昭和十二年一月二十九日
昭和十二年一月三十一日發行
昭和十二年二月十五日翻刻發行
昭和十二年二月三十一日翻刻發行

著作權所有

發行兼
著作

文

部

省

定價金拾五錢

小學國語讀本專科用卷七

日五月二年一十和昭
濟查檢省部文

發行所

日本書籍株式會社

印刷所

東京市小石川區久堅町百八番地
日本書籍株式會社工場

代表者

大橋光吉

翻刻發行
兼印刷者

東京市小石川區久堅町百八番地
日本書籍株式會社

終

桐原義司

杉本千栞

昭和

63

6

10

寄贈

岩角に立てば

ふむ砂はさくくと鳴る。

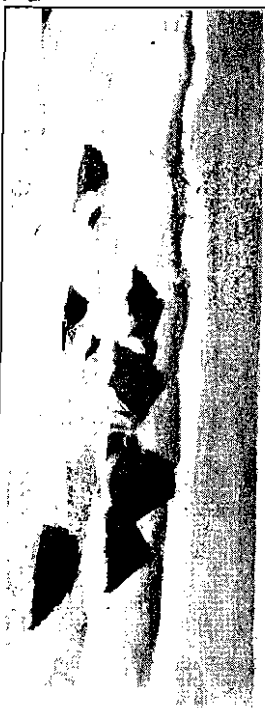
吹く風はさわやかに

かもめが飛ぶ。

雲が切れる、

晴れやかな朝の海。

第一 海



尋國七

もくろく

第一	海	一
第二	弟橋媛	三
第三	潮干狩	七
第四	わざくらへ	十四
第五	からかさ松	十九
第六	朝	二十一
第七	苗代の頃	二十四
第八	木の高さ	二十八
第九	笛の名人	三十二
第十	縁日	三十七
第十一	朝顔の日記	三十九
第十二	兵營だより	四十七
第十三	錦の御旗	五十四
第十四	鐵工場	五十九
第十五	大阪	六十二
第十六	木下藤吉郎	七十三
第十七	油蟬の一生	九十三
第十八	五作ちいさん	百
第十九	夕立	百七
第二十	笑話	百九
第二十一	安倍川の渡し	百十三
第二十二	夕日	百十六
第二十三	お月見	百十八
第二十四	鳴子	百三十二
第二十五	横濱港	百三十四
第二十六	乃木大将の幼年時代	百四十二

尋國七

三三三第七 苗代の頃

春の少し暖い晩くく、
 と蛙の鳴く聲がする。
 其の頃から晝間は廣いた
 んぼの一部でもう苗代の
 仕事が始る。眞黒な牛が
 いうくといて行くか
 らすきのあとに掘返され

掘 部



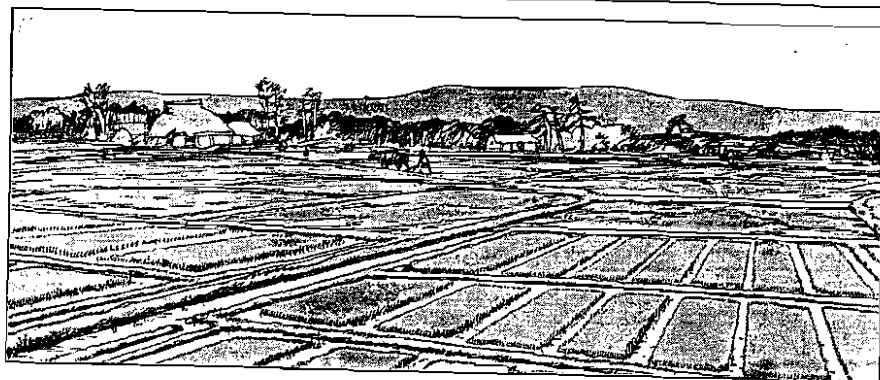
苗代七

耕 泥

種

た新しい土が暖い日光に照らされる。
 土が掘返され、れ打がすむと、田に水がなみ
 なみと張られる。今度は牛がまぐはを引い
 て、泥水の中を行ったりもどつたりする。か
 うして、田の土は、だんくこまかく耕されて
 行く。
 夜、遠田で鳴く蛙の聲がくく、くく、と。
 そろく、にぎやかに聞え出す。
 種まきがすんで十幾日、浅い水の上に、三粒か

苗 揃 形 | 軽



三糎ぐらゐ、若々しい緑の苗が出揃つて行くのは、見るから氣持のよいものだ。ちやうど、たんざく形の緑の敷物を、程よく間を置いて敷並べたやうである。

苗が二十糎ぐらゐにのびて、葉先が朝風に軽くゆれる程になると、廣いたんぼは次第ににぎ

やかになる。そろ／＼汗ばむ程暑くなつた日ざしを受けて、男も、女も、牛も、泥田の中で働く。こゝの田も、あそこの田も、掘返した土のかたまりの間には、もうひた／＼と水がたへられて居る。

蛙のすみかが、かうしてたんぼ一ぱいに廣がるのだ。晝間は、働く人や牛にゑんりよをするやうに聲をひそめて居るが、夕方から夜になると、自分たちの世界だといはんばかりに

さわぎたてる。家の前も、後も、横も、まるで夕立の降るやうに、蛙の聲で一ぱいである。静かだといふおなかの夜も、此の頃は、雨戸をしめて始めてはつとする。もう田植が間近なのである。

三三三第八 木の高さ

僕の學校に、大きな杉の木が一本ある。高さ、はどのくらゐあらうか。中村君は八米ぐら

計

おだと言ひ、石川君は十米以上もあると言ふ。みんながいろ／＼な事を言ふが、誰もまだ其の木のはんたうの高さを知つて居る者はない。僕は、どうかして一度計つてみたいと思つて居た。其の中に僕は氣がついた。朝は物のかげが非常に長いが、だん／＼ちゞまつて、お晝頃になると、かげの方が其の物より短くなり、それから又だん／＼と長くなつて行く。そこで

航諸磯影岬網築威減徑沿眼點
似巧妙胴具關境泉頂逆周墨

終

資料

學國八

昭和十二年六月五日修正印刷
昭和十二年六月八日修正發行
昭和十二年六月八日翻刻印刷
昭和十二年七月十日翻刻發行

小學國語讀本臺灣科用卷八

定價金拾四錢

著作權所有

發行者兼
著者

文

部

省

東京市小石川區久堅町百八番地 27
日本書籍株式會社
兼印刷者

代表者 大橋 光吉

東京市小石川區久堅町百八番地
日本書籍株式會社工場
印刷所

昭和二十六年九月
文部省檢査済

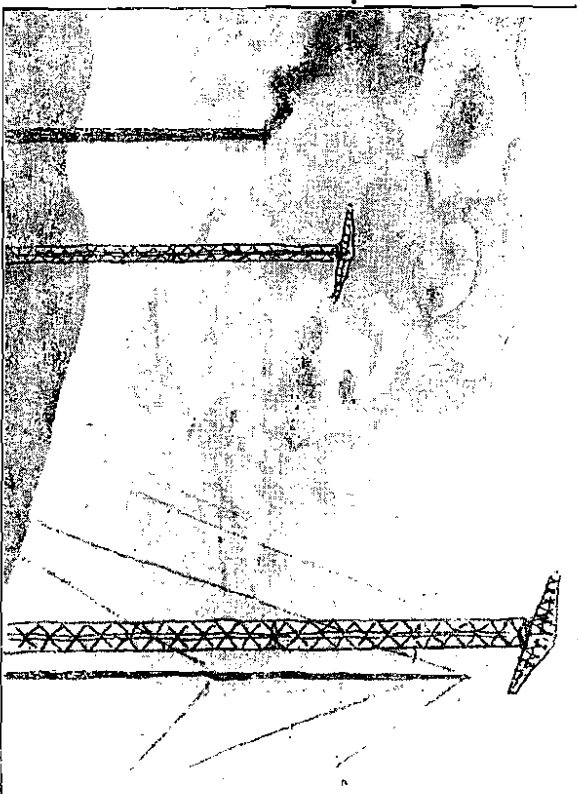
發行所

日本書籍株式會社

第一	青空	一
第二	つばめはどこへ行く	三
第三	吳鳳	十二
第四	大連だより	十八
第五	朝の大連日本橋	二十八
第六	くりから谷	三十二
第七	萬壽姫	三十五
第八	晩秋	四十七
第九	大演習	五十一
第十	菊	六十一
第十一	ひよどり越	六十三
第十二	振子時計	六十八
第十三	小さい傳令使	七十四

第十四	自動織機	七十九
第十五	福壽草	八十八
第十六	又キー	九十
第十七	扇の的	九十七
第十八	弓流し	百一
第十九	物のねだん	百四
第二十	廣瀬中佐	百十二
第二十一	ホル、の一日	百十五
第二十二	コロニアスの卵	百十四
第二十三	漁村	百十七
第二十四	水族館	百十四
第二十五	早春	百十八
第二十六	清水トネル	百五十

第一 青空
青空は
どこまでも
高いよ。
細長い煙突や
アンテナが
背のびしてゐる。



文日習字校資料

受入先	昭種	昭和	昭和
田中	昭和	昭和	昭和
昭和	昭和	昭和	昭和
昭和	昭和	昭和	昭和

日七十月二十年二十和昭
 濟查檢省部文

發行所

日本書籍株式會社

印刷所

東京市小石川區久堅町百八番地
日本書籍株式會社工場

代表者

大橋光吉

兼印刷者
翻刻發行

東京市小石川區久堅町百八番地28
日本書籍株式會社

著作兼
發行者

文部省

著作權所有

昭和十二年十二月十一日修正印刷
 昭和十二年十二月十五日修正印刷
 昭和十二年十二月十五日翻刻印刷
 昭和十三年一月三十日翻刻發行

定價金拾五錢

小學國語讀本尋常科用卷九

章國九

季堤淡翼操敗州秒績輸術類差
 脚總艦警戒員副奏清臣價求欲
 久實志封灣街茂料題牧處巡序
 條奇齒佛詩期濃彩舍握絹濁祖
 恩脇銳際盡舊利率倍枕援賴朽
 謝捕伏冊錄庫庫姓歷史甸斗極寫
 覺更球刺麻尉忙鹽唱骨柳歎河
 至蹈致然筆示玩隻離斬章堅捧
 絕榮育系

終

季

四月といへば春はもうながばである。月の初はまだ寒くて、冷たい雨の降りしきることもあるが、其の間にも柳の芽の緑が日ましに太り、畠や道端の若草が目に見えてのびて来る。桃の花は三月の末頃咲出して、此の月の初に、そろ／＼花盛を見せる。待たれるものは櫻である。早い年には三月の末が四月のごく初に、蕾のほころびることがあるが、さういふ年には季節はづれの雪が降つたりして、せつ

第一 四月

尋國九

0506

第十四	四月	一
第十三	春の夜	五
第十二	飛行機の發明	七
第十一	八幡太郎	十八
第十	松下禪尼	二十
第九	手まり	二十二
第八	小ざなねち	二十三
第七	軍艦生活の朝	三十二
第六	馬ぞろへ	三十九
第五	松平信綱の幼時	四十三
第四	雀の子	四十七
第三	アメリカだより	四十八
第二	佛法僧	六十二
第一	いも掘	六十八

目録

第十五	晴間	七十一
第十四	三日月の影	七十四
第十三	圖書館	九十二
第十二	星の話	九十九
第十一	京城へ	百六
第十	僕の子馬	百十四
第九	母馬子馬	百二十三
第八	秋のおとづれ	百二十六
第七	袴垂	百三十三
第六	ひざ栗毛	百三十三
第五	空の旅	百四十五
第四	もくせいの花	百五十八
第三	橘中佐	百六十
第二	國語の力	百六十六

尋國九

月の頃「ツポウソウ」と鳴く聲は何といつても美しい深みのある神祕的な聲です。

第十四 とも掘

授

五時間目の授業がすむと先生はにくくして「今日はこれからじやがともを掘りませう。皆何時ものやうにこゝで支度をして、学校園へお集りなさい。」

とおつしやつた。これこそ僕たちが一週間も前から毎日々々待つてゐた命令だったので、皆一せいに

舎

小をどりして喜んだ。さうして大急ぎで学校道具をかばんにしまひ、めい／＼身輕になつて、校舎の後の菜園に集つた。枯れかゝつて一面に黄色になつたじやがとも畠を、午後の日がかん／＼と照らしてゐる。

當番が農具小屋から、鍬・シャベルなど、いろいろの道具を出して來た。先生も大きな箱を持つて來て掘つたいものは此の中へ入れるやうにとおつしやつた。皆は一せいに掘りにかゝる。僕は割合にしつかりしてゐる一本の蕪を握つて、くつと引張つた。

盛

大人

絹



やはらかい黒い土がむく／盛
 上つたと思ふと四方へ／づれる。
 中からみつく／しい白茶色の玉
 がじゆずつなきになつてゐるこ
 ると出て来た。大人の握りこぶ
 し程の大きなものあれば雀の卵
 くらゐなかはいらしいのもある
 がどれも皆絹のやうなうすい皮がはち切れさうに
 よく實がいつてゐる。隣では莖がくさつて引抜け
 ないのを星野君が根氣よく掘つて掘つたものを一

第十五 晴間

さみだれの晴間うれしく、
 野に立てば

つ一つていねいに並べて行く。
 あちらでもこちらでも驚く聲感にする聲嬉しき
 うな聲。
 ふと氣がつくと校長先生と山田先生が箱のそば
 へ来ておもしろさうに僕等の仕事を見ていらつし
 やつた。

昭和十三年五月二十三日修正印刷
 昭和十三年五月二十五日修正發行
 昭和十三年五月二十五日翻刻印刷
 昭和十三年六月十七日翻刻發行

著作權所有

著作兼
 發行

文

部

省

定價金拾五錢

小學國語讀本尋常科用卷十

昭和三十一年六月一日
 文部省檢査濟

翻刻發行 兼印刷者
 代表者 大橋光吉
 日本書籍株式會社
 東京市小石川區久堅町百八番地 28
 印刷所 日本書籍株式會社工場
 東京市小石川區久堅町百八番地

發行所

日本書籍株式會社

第一	明治神宮	一
第二	霧	七
第三	科學博物館	八
第四	足助次郎重範	十四
第五	水兵の母	十八
第六	南洋だより	二十四
第七	朝顔に	三十六
第八	雨の養老	三十七
第九	柿の色	四十七
第十	稻むらの火	五十二
第十一	朝鮮の田舎	六十
第十二	水彩畫	六十七
第十三	久田船長	七十
第十四	母の力	七十八

目録

第十五	水師營の會見	八十八
第十六	張良と韓信	九十三
第十七	雲の山	九十七
第十八	南極海に鯨を追ふ	百十三
第十九	バナマ運河	百二十
第二十	冬の月	百三十二
第二十一	國法と大慈悲	百三十四
第二十二	開票の日	百四十一
第二十三	春淺し	百四十八
第二十四	熊野紀行	百五十
第二十五	汽車の發明	百五十六
第二十六	「あじあ」に乗りて	百六十二
第二十七	御民われ	百七十四

尋國十

尋國十

第一 明治神宮

參拜

神宮橋を渡りて、先づ仰ぐ大鳥居に、菊花の御紋章を拜するかしこと。南參道に入れば、夜來の雨に清められし玉砂利さくさくと鳴りて、參拜の人々、あたかも言合はせたる如く、足並の自ら揃ふも尊く思はる。御造營當時、國民の眞心もて、たてまつりたる木は、參道の左右を始め、至る所すき間もなき木立となりて、神域いよ／＼おこそかならんとす。

昭和十三年二月五日印
 昭和十三年二月七日發
 昭和十三年二月七日翻刻印刷
 昭和十三年二月二十日翻刻發行

著作權所有

發行者兼
 著作

文

部

省

定價金拾六錢

小學國語讀本尋常科用卷十一

日八月二年三十和昭
 濟查檢省部文

發行所

日本書籍株式會社

印刷所

東京市小石川區久堅町百八番地
 日本書籍株式會社工場

代表者

大

橋

光

吉

翻刻發行
 兼印刷者

東京市小石川區久堅町百八番地²⁸
 日本書籍株式會社

目録

第一	吉野山	一
第二	見渡せば	五
第三	京都	七
第四	源氏物語	十三
第五	法隆寺	二十五
第六	五月の太陽	三十五
第七	姉	三十八
第八	電話の發明	四十二
第九	瀬戸内海	五十一
第十	日本海海戰	五十四
第十一	皇國の姿	六十一
第十二	古事記の話	六十三
第十三	松阪の一夜	六十八
第十四	北海道	七十四
第十五	我は海の子	八十九
第十六	間宮林藏	九十二
第十七	樺太の旅	九十九
第十八	雲のさま	百八
第十九	燕岳に登る	百十五
第二十	蟲の聲	百三十
第二十一	十和田紀行	百三十一
第二十二	歐洲航路	百三十七
第二十三	月光の曲	百五十四
第二十四	月の世界	百六十三
第二十五	秋	百七十二
第二十六	鐵眼の一切經	百七十三
第二十七	空中戰	百七十八
第二十八	日本刀	百八十七

尋國十一

尋國十一

吉

詠 櫻

第一 吉野山

吉野山かすみの奥は知らねども見ゆる限りは櫻
なりけり
全山花の雲に包まれたる吉野山の光景まのあた
り見るが如し。
吉野神宮驛に下車して、櫻樹多き坂道を登る。先
づ後醍醐天皇をまつれる吉野神宮に詣て、村上義光
の墓をとぶらふ。更に進めば眺望、よく開けて
見渡す限りすべて花なり。

これはこれとはばかり花の吉野山

第一 吉野山

瀧の音かな

蟻ありと蟻ありうなづきあひて何かことありげにはしる
井い手て 曙あけぼの 覧らん

西へ東へ

大おほ隈かえ 言こと 道みち

かささせるさゝぬも過ぐる橋の上の夕暮近き雨
のはれがた

野 村 望 東

紅のやまと錦もいろくの絲まじへてぞあやは
織りける

大おほ田た垣がき 蓮れん 月げつ

昭和十四年五月三十一日修正印刷
昭和十四年六月二日修正發行
昭和十四年六月二日翻刻印刷
昭和十四年六月三十一日翻刻發行

重文旧開智学校資料 著作権所有

著者兼
發行者

文 部 省

日本書籍株式會社
東京市小石川區久堅町百八番地 30

大 橋 光 吉

日本書籍株式會社工場
東京市小石川區久堅町百八番地

日七月六年四十和昭
濟查檢省部文

平成
元年二月一日寄贈
先
入
受
桐原義司
重文旧開智学校

發行所

日本書籍株式會社

目録

第一	玉のひびき	一
第二	出雲大社	三
第三	古代の遺物	八
第四	支那の印象	十六
第五	孔子と顔回	二十九
第六	西山莊の秋	四十二
第七	鎌倉	四十六
第八	黄瀬川の對面	四十九
第九	末廣がり	五十三
第十	姫路城	六十三
第十一	鳥居勝商	七十三
第十二	初冬二題	七十六
第十三	機械化部隊	八十一
第十四	ほまれの記章	八十五
第十五	萬葉集	九十五
第十六	奈良	百三
第十七	修行者と羅刹	百七
第十八	歐洲めぐり	百十七
第十九	リヤ王	百三十五
第二十	裁判	百五十三
第二十一	雪残る頂	百五十九
第二十二	太陽	百六十
第二十三	關孝和	百六十五
第二十四	白洲燈臺	百七十三
第二十五	雲國の春	百七十九
第二十六	靜寛院宮	百八十五
第二十七	山ざくら花	百九十四

尊國十二

尊國十二

第一 玉のひびき

明治天皇御製

古のふみ見るたびに思ふかなおのが治むる國は
 いかにと
 あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが
 心ともがな
 目に見えぬ神の心にかよふこそ人の心のまこと
 なりけれ
 さしのぼる朝日の如くさわやかにまたまほしき
 は心なりけり

第一 玉のひびき